

# 書紀歌謡1番の「廻」字について

——β群の字音表記の在り方から考える——

亀山泰司

はじめに

日本書紀には周知の通り、字音表記による128首の歌謡が収められている。その最初のもは、卷一・神代上（β群とされる<sup>①</sup>）の素戔鳴尊と奇稻田姫が結婚する場面、素戔鳴尊が謡うという形で出てくる。校訂本文は以下の通り。<sup>②</sup>

夜句茂多菟 伊弩毛夜霸餓岐

菟磨語味爾 夜霸餓積菟俱虛 贈廻夜霸餓岐廻

第一句から第四句までの訓みは定まっている。本論文で問題とするのは第五句の最後の文字である。<sup>③</sup> 古来、「そのヤヘガキヲ」と訓まれてきたが、比較的新しいテキストは挙って「そのヤヘガキエ」と訓んでいる。当該歌謡末尾の文字、「廻」という文字は、「エ」と訓むべきか、それとも従来通り「ヲ」と訓むべきか、この点をあらためて考えて

みたい。

まずは先行研究を概観し、論点を提示する。古写本や古注釈書など、いずれも「ヲ」と訓んでいる。<sup>④</sup> 『上代假名遣の研究』（一九五三）において大野晋氏が「エ」と訓んだのが、「エ」の初出である。大野氏は、この書の本文篇で「そのヤヘガキエ」という訓みを附し、語彙篇で「え」の項に「廻<sup>エ</sup>」（助詞・間投）を掲げている。<sup>⑤</sup>

この訓みは、岩波大系『日本書紀』（一九六七）に引き継がれた。<sup>⑥</sup> 頭注（担当は大野晋氏か）に、「廻は、広韻に戸恢切、灰韻の文字。呉音エ、漢音クワイ。ここではおそらくエと訓むのであろう」とある。<sup>⑦</sup> 小学館新編全集『日本書紀』（一九九四）もこれに準拠し、訓みを「エ」とする。<sup>⑧</sup> やはり頭注に一言、「『廻』は呉音エ」とある。

書紀歌謡の本文として大野晋氏の前掲書を採用する岩波

大系『古代歌謡集』(一九五七)の場合は、「原文『廻』はエと訓まれる」としながらも、「エという助詞が名詞の下に沿う例がない」という理由で、訓みとして旧訓通りの「ヲ」を採る。武田祐吉氏の『記紀歌謡集全講』(一九五六)、大野透氏の『萬葉假名の研究』(一九六二)も同様の理由により、訓みとして「ヲ」を採る。

漢字音の面(廻)の呉音が「エ」であること)からは「エ」が支持され、その一方、語法の面(体言に後接する「エ」が皆無であること)からは「ヲ」が支持されていると言えるだろう。しかし、漢字音の面から見て、本当に「エ」という訓みが支持されるのか。本論文は、書紀歌謡の表記字に関する森博達氏の知見( $\alpha$ 群・ $\beta$ 群)を踏まえ、漢字音の面から見ても、「そのヤヘガキヲ」という訓みが支持されることを論ずるものである。

一

さしあたり、最初に注目すべきは、有坂秀世氏の『上代音韻攷』(一九五五)に見られる以下の記述である。

灰賄隊韻は、韻鏡では哈海代韻(周代古音 $\alpha$ )に對する合口韻になつてゐるし、又前記の皆駭怪韻の合口(周代古音 $\alpha$ )とは區別されなければならぬから、その中心母音は恐らく $\ddot{e}$ ではなくて $v$ ( $u$ )の方で

はなかつたかと思はれる。(欽明紀所引百濟本記では未韻の「既」をコに充て、神武紀では未韻の「費」をホに充て、又和名抄では「愛宕」を於多岐と訓じてゐるが、同様に、神代紀上では灰韻の「廻」をヲの假名に用ゐてゐる。)(※波線は筆者)

波線部は、書紀歌謡1番において「灰」韻字の「廻」がオ列の「ヲ」に充てられることを認めたくえて述べている箇所である。「愛」は「哈」韻。その合口韻が「灰」韻。この点に注意。先に挙げた武田氏の『全講』も、

廻は、胡雷の切、灰韻の字であつて、エとも読まれるが、「坂下、此云三瑳伽梅苔」(神武天皇紀)のように、同じ灰韻の梅苔を、モトに当てたと見られる用例もあるので、やはりヲの音に当てたものと見るべきである。と指摘し、また、大野透氏の『萬葉假名の研究』も、オ列に使われる「哈」・「灰」両韻字の具体的な例(日本書紀の用例も含まれる)を網羅的に挙げたくえて、

「灰」韻の廻はヲの假名になり得るはずである。と一言、指摘する。

これら二者の指摘の是非は、ひとまず当該の歌謡1番の所属(即ち $\alpha$ 群か $\beta$ 群か)に依存する。なぜならば、同じ日本書紀といつても、「哈」・「灰」両韻字のオ列への使用状況は、両群で全く異なるからである。

ここで森博達氏の主著に従って両群の違いを簡単に見ておこう。<sup>(16)</sup> 複数の字音体系に基づく仮名が混在するとされるβ群には、次のような典型的な四つの特徴(ローマ数字を便宜的に附した)が認められる。

(I) 力行に牙音字のほか喉音字も使用  
β群

(II) 力行以外にも次清音字を用いる  
β群

(III) エ列乙類に「哈・灰」両韻以外も使用  
β群

(IV) オ列にも「哈・灰」両韻を用いる  
β群

今回の問題に直接関係するのは「IV」である。α群では、「哈」・「灰」両韻字はエ列乙類(およびア行のエ)専用であるのに対し、β群では、オ列にも「哈」・「灰」両韻字が多く用いられる(歌謡範囲に66例、訓注範囲に12例)。<sup>(17)</sup>

・歌謡……苔36、廻18、耐6、倍5、陪1。以上66例。  
・訓注……苔7、廻3、倍1、梅1。以上12例。

【「哈・灰」韻字の使用状況——延べ数と字種】

	▼書紀α群	▼書紀β群
エ列	54例(51例) 愛哀該開 凱檀贈擬尋倍陪杯梅每	60例(52例) 愛開慨擬 耐倍陪珮背梅每妹味隈
オ列	0例(0例)	78例(66例) 苔迺耐倍 陪梅

(※括弧内は歌謡範囲。太い傍線はエ列・オ列共用)

実のところ武田氏や大野透氏が指摘するオ列に使われる「哈・灰」韻字の日本書紀の用例は、総てがβ群の内部に有り、α群の内部には無い。したがって、当該の歌謡1番に關し、現行の区分が認められるかどうか、即ち、β群と言えるかどうか、この点は何よりも肝腎なのである。

二

そこで改めて歌謡1番の表記を点検する(次頁のB)と、まず、3箇所「ツ」(力行以外)に次清音字の「菟」が使われ(上記「II」に該当、加えて1箇所「の」(オ列)に「哈」韻字の「廻」が使われる(上記「IV」に該当)。

歴然たるβ群の徴証が4箇所に見れている(特に、オ列に「哈」韻字が使われる点に留意すべき。後に詳述)。

この二つの字種(菟・廻)は、むしろα群には皆無だが、字種という点に着目すると、他にも「句」「茂」「毛」「霸」「語」「味」「廻」の7字種(箇所としては9箇所)がα群には皆無の字種である。短歌31文字のうち13文字が、β群だけに現れる字種で構成されている。このうち、「霸」字、「味」字、「廻」字の使用は歌謡1番に局限される(つまり卷一の当該歌謡においてのみ用いられる)とはいえず、それ以外の6字種(菟・廻・句・茂・毛・語)は、他のβ群の卷々でも使われている。

B<sup>(20)</sup>

夜<sup>β</sup>向<sup>β</sup>茂<sup>β</sup>多<sup>β</sup>菟<sup>β</sup> <sup>(II)</sup> 伊<sup>β</sup>弩<sup>β</sup>毛<sup>β</sup>夜<sup>β</sup>霸<sup>β</sup>餓<sup>β</sup>岐<sup>β</sup>

菟<sup>β</sup>磨<sup>β</sup>語<sup>β</sup>昧<sup>β</sup>爾 <sup>(II)</sup> 夜<sup>β</sup>霸<sup>β</sup>餓<sup>β</sup>枳<sup>β</sup>菟<sup>β</sup>俱<sup>β</sup>廬 <sup>(IV)</sup> 贈<sup>β</sup>廻<sup>β</sup>夜<sup>β</sup>霸<sup>β</sup>餓<sup>β</sup>岐<sup>β</sup>廻<sup>β</sup>

※本文右の(II)などの記号は、前頁の通り

※太い波線は、β群だけに現れる字種

※そのうち囲いは、他のβ群でも使われる字種

(その左にβを附した)

一方、当該の歌謡1番に対し、「β群で使われているといつても、この歌謡1番だけで使われている字種」(β群中、歌謡1番だけに現れる字種)を抽出し、その中でα群に使用例が存在するものを拾うと、左の通りである。

A<sup>(20)</sup>

夜<sup>α</sup>句<sup>α</sup>茂<sup>α</sup>多<sup>α</sup>菟 <sup>(II)</sup> 伊<sup>α</sup>弩<sup>α</sup>毛<sup>α</sup>夜<sup>α</sup>霸<sup>α</sup>餓<sup>α</sup>岐<sup>α</sup>

菟<sup>α</sup>磨<sup>α</sup>語<sup>α</sup>昧<sup>α</sup>爾 <sup>(II)</sup> 夜<sup>α</sup>霸<sup>α</sup>餓<sup>α</sup>枳<sup>α</sup>菟<sup>α</sup>俱<sup>α</sup>廬 <sup>(IV)</sup> 贈<sup>α</sup>廻<sup>α</sup>夜<sup>α</sup>霸<sup>α</sup>餓<sup>α</sup>岐<sup>α</sup>廻<sup>α</sup>

※太い波線は、β群中、歌謡1番だけに現れる字種

※そのうち囲いは、α群に使用例が存在する字種

(その左にαを附した)

これに該当するのは「弩」「廬」の2字種に限る(箇所としては2箇所)。31箇所のうち2箇所に過ぎず、百分率で言えば「六・五%」に過ぎない(しかも、その2箇所に關しても、「模」韻字でありながらウ列に使われている点はα群らしくない<sup>(21)</sup>)。

上記のBにおいて四角で囲まれ、その左にβが附された箇所は31箇所のうち8箇所、「二五・八%」である。この百分率(β群の固有字種が使われる割合)は、上記のAにおいて四角で囲まれ、その左にαが附された箇所の割合に比べて相当に大きい(β群の他の巻の歌謡に対し、同様に調べてみても、概ね似た数字が得られる<sup>(22)</sup>)。やはり、歌謡1番はβ群と考えざるを得ないだろう。

以上の通り、カ行以外に次清音字が使われ、また、オ列に「哈」韻字が使われ、それだけでなく、使われる字種が大きくβ群に傾いている当該の歌謡1番は、明確にβ群と言える。その場合には、今回の問題である「廻」の箇所に關する判断も、β群の字音表記の在り方に即して為されるべきである(以下、β群の在り方を見ていく)。

三

既述の通り、α群では、「哈」・「灰」両韻字はエ列乙類(およびア行のエ)専用であるのに対し、β群では、オ列

にも〔哈〕・〔灰〕両韻字が多く用いられる（歌謡の範囲で  
 苔36、廻18、耐6、倍5、陪1。以上66例。訓注の範囲で  
 苔7、廻3、倍1、梅1。以上12例。合計78例）。

ここで太い傍線は、エ列・オ列共用の字種である（左表も参照）。このように同一字母が異なる母音に共用されるという在り方も、複数の字音体系が混在するβ群の特徴と言<sup>23</sup>える。特に注目すべきは、β群における「倍」字の使用状況である（ハ行の状況はワ行の状況の参考になる）。

書紀β群では、〔哈〕韻字ないし〔灰〕韻字の「倍」が、エ列〔へ〕5例、「べ」3例と、オ列〔ほ〕6例に、殆ど拮抗して用いられる。「廻」の呉音は「エ」、呉音形は「㊦」形だが、「倍」の呉音形にも「㊦」形が存する（類聚名義抄の和音）。書紀β群では、その「㊦」形の呉音形を持つ「倍」字がオ列にも多用されるのである。

【β群のエ列・オ列共用の字種】（※α群には無い）

	エ列	オ列	オ列の用例
耐（タ行）	1例	6例	誉戻耐母（寄れども）など
倍（ハ行）	8例	6例	珥倍廻利（鳩鳥）など
陪（ハ行）	11例	1例	茂苔陪之（廻し）
梅（マ行）	22例	1例	璫伽梅苔（坂本）

（※いずれも〔哈〕韻字または〔灰〕韻字）

【β群のエ列の「倍」字】（※もちろん乙類）

- ・珥倍毛菟 卷三（訓注）
- ・伽餓奈倍氏 卷七（歌謡26番）
- ・于泥珥等邏倍菟 卷九（歌謡31番）
- ・伊菟岐餓字倍能 卷十一（歌謡60番）
- ・勾倍枳予臂奈利 卷十三（歌謡65番）
- ・菟伽倍摩都羅武（2例） 卷廿二（歌謡102番）
- ・字倍之訶茂 卷廿二（歌謡103番）

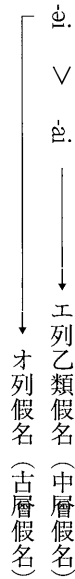
【β群のオ列の「倍」字】

- ・異波臂茂等倍屢 卷三（歌謡8番）
- ・異波比茂等倍離 卷三（歌謡8番）
- ・区珥能摩倍邏摩 卷七（歌謡22番）
- ・珥倍廻利能 卷九（歌謡29番）
- ・異枳廻倍呂之茂 卷九（歌謡30番）
- ・伊箇之倍虛 卷廿三（訓注）

β群の母音複用字種（氣・素・泥・怒・倍・陪・莽）を調べてみると、「氣」（け4例、き2例）や「素」（ス4例、ソ4例）の場合など、呉音系の仮名（呉音系の字音を背景に持つ仮名）と漢音系の仮名（漢音系の字音を背景に持つ仮名）の対立と捉えられる場合が多いが、オ列の「倍」字（右に全例を列挙した）については、その背景に、漢音系の字音ではなく、むしろ古音系の字音が想定される。

【萬葉假名と「哈」韻字との關係】

(古音) (六朝〜中古音)



この点に関しては、沼本克明氏の『日本漢字音の歴史的  
研究—體系と表記をめぐって—』(一九九七)の中に簡明  
な図式が掲げられている(右側に再現)。「哈」韻(および  
その合口韻である「灰」韻)は、日本の萬葉假名において  
エ列乙類とオ列に共用されるが、前者の背景には、「ㄷ.重  
母音」(六朝〜中古音)があり、後者の背景には、「ㄷ.重  
母音」(古音)があるという図式である。<sup>(26)</sup>

また、日本書紀β群の仮名の全体像についても、沼本氏  
が既に『日本漢字音の歴史』(一九八六)の「日本書紀の  
仮名の背景」の項で、

日本書紀には新来の漢音系字音を背景とする仮名が使  
用されるが、そのうち、β群は古事記と共通する呉音  
系字音を背景にした仮名(及び一部には更にそれ以前  
の仮名をも)を混在させるものであった。

とまとめている。β群で「ホ」に充てられる「倍」字など  
は、ここで言われる「更にそれ以前の仮名」、即ち呉音系  
字音以前の古音(古韻)を背景にした仮名と見てよい。<sup>(27)</sup>

つまり、書紀β群の仮名は、大きく三層(漢音系・呉音  
系・古音系の三層)で捉えられ、エ列(乙類)に使われる  
「倍」字は呉音系の仮名、オ列に使われる「倍」字は古音  
系の仮名にそれぞれ該当するということである。

・「倍」の呉音形に「ㄷ」形あり(オ列にも使用)

まず「倍」字と「廻」字は韻類が共通し(「哈」韻また  
は「灰」韻)、呉音形に共通して「ㄷ」形がある。ところが  
が、書紀β群では、その「ㄷ」形の呉音形を持つ「倍」字  
がオ列にも多用され、それは、古音系の仮名と捉えられる。  
この場合、「廻」の呉音が「エ」であっても、β群である  
当該の歌謡一番においては、オ列の「ㄷ」に「灰」韻字の  
「廻」が充てられた可能性を十分に想定し得るだろう。<sup>(28)</sup>

四

さらに、歌謡一番の「廻」字を考えるうえで留意すべき  
は、当該字が使用される結句(贈廻夜霸餓岐廻)において、  
「の」に「廻」字が使われている点、即ち、オ列の音節に  
対し、「哈」韻字が現に使われている点である。この点を  
的確に評価しなければならぬ。

書紀β群において、同じ「灰」韻字の「隈」が「エ」に  
使われているということがある。だが、その使われている

歌謡12番(卷三)を見ると、当該の歌謡1番(卷一)とは文字使用状況(どの音に、どの漢字を用いるか。どの漢字を、どの音に用いるか)が異なっている。これを、同列に並べて見ることはできない。

【歌謡1番】↓《オ列の「哈・灰」韻字》が存在

ヤクモタツ イヅモヤヘガキ

夜句茂多菟 伊弩毛夜霸餓岐

ツマごめニ ヤヘガキツクル そのヤヘガキ→「ヲ」

菟磨語味爾 夜霸餓枳菟俱盧 贈廻夜霸餓岐廻

【歌謡12番】↓《オ列の「哈・灰」韻字》は存在せず

タタナめテ イナサのヤマの このマユモ

哆哆奈梅豆 伊那嗟能椰摩能 虚能莽由毛

イユキマモラヒ タタカヘバ ワレハヤエヌ

易喻耆摩毛羅毘 多多介陪磨 和例破椰隈怒

シマツトリ ウカヒガトモ イマスけニコネ

之摩途等利 宇介譬餓等茂 伊莽輪開珥虚禰

どちらもβ群の歌謡ではある。しかし、歌謡12番の場合には、《オ列の「哈・灰」韻字》が全く使われない。3箇所ある「の」の音節に「能」が使われ、2箇所ある「と」の

音節に「等」が使われる(いずれも「登」韻字)。尚かつ、エ列にもオ列にも使い得る「灰」韻字の「陪」が、エ列に使われる。それに対し、問題にしている歌謡1番の場合は、「と」の音節がなく、「の」の音節がただ1箇所ある、その1箇所「の」において、「哈」韻字の「廻」が使われる。第五句(贈廻夜霸餓岐廻)の二文字目、「その八重垣」の「の」の箇所において、現に、《オ列の「哈・灰」韻字》が使われる。この両者の違いに留意すべきである。

β群においては確かにオ列に「哈」韻字や「灰」韻字が用いられるが、詳しく見てみると、実際に用いられるのは、β群の歌謡が77首あるうち、半分以下(四割強)の33首に限る。満遍なく分布しているわけではなく、たとえば、卷十二(1首)、卷十三(9首)、卷廿二(3首)では未使用であり、卷十(8首)でも未使用に近い(使用は8首中の1首、しかも1箇所のみ)。逆に言えば、使われる範囲においては、割と固まって使われるわけである。即ち、《オ列の「哈・灰」韻字》は共起する傾向にある。そのことを以下に二つのデータで示す。

まず一つ目は、「哈」韻の「廻」字を「の」や「ど」に一回でも用いる歌謡においては、重ねて「廻」字が使われたり、他の《オ列の「哈・灰」韻字》(たとえば「苔」字など)が使われたりするというデータである(次頁)。

「廻」字を用いる歌謡における

オ列の〔哈・灰〕韻字の使用状況<sup>②</sup> (対象14首)

卷二(2番)	廻	廻	廻	(3箇所) ★
卷二(3番)	廻	廻	廻	(共起不能な環境)
卷二(6番)	廻	耐	耐	(2箇所) ★
卷三(7番)	廻	廻	廻	(2箇所) ★
卷三(9番)	廻	苜	苜	(5箇所) ★
卷三(11番)	苜	苜	苜	(3箇所) ★
卷三(13番)	苜	苜	苜	(4箇所) ★
卷五(18番)	廻	苜	苜	(3箇所) ★
卷五(19番)	廻	廻	廻	(2箇所) ★
卷九(29番)	苜	苜	苜	(3箇所) ★
卷九(30番)	苜	苜	苜	(共起不能な環境)
卷十(37番)	廻	廻	廻	(共起不能な環境)
卷十一(47番)	廻	廻	廻	(共起不能な環境)
卷十一(59番)	廻	廻	廻	(共起不能な環境)

より詳しく説明する。一首の中に「と・ど・の・ホ」のいずれかの音節が1箇所だけ存在する場合は、その一首の中で使い得る《オ列の〔哈・灰〕韻字》は最大1個である。たとえば歌謡3番(卷二)の場合は「の」の音節が1箇所あり、「廻」字が使われるが、他に「と・ど・の・ホ」の

音節が存在しない。そのため、必然的に一首の中の《オ列の〔哈・灰〕韻字》は1個となる(共起不能な環境)。

この点に注意しながら、具体的に「廻」字を用いる歌謡を抜き出し(14首)、一首毎に《オ列の〔哈・灰〕韻字》の使用状況を見ると、たとえば歌謡30番(卷九)の場合は、第五句の三文字目に「廻」が使われるだけでなく、直後の四文字目に「苜」が使われ、さらに、第三句の四文字目に「苜」が使われる(左に具体的に示す)。この場合、一首中の《オ列の〔哈・灰〕韻字》は延べ3個である。たとえば歌謡29番であれば、「珥苜廻利能」の箇所で共起し、《オ列の〔哈・灰〕韻字》は延べ2個である。

〔歌謡30番〕↓《オ列の〔哈・灰〕韻字》が共起

アフミのミ セタのワタリニ カヅクトリ  
 ア布瀾能瀾 齐多能和多利珥 伽豆区苜利  
 めニシミエネバ イキド、ホろシモ  
 梅珥志瀾曳泥麼 異枳廻苜呂之茂

※太い波線は、「廻」字の使用箇所

※傍点は、オ列の〔哈・灰〕韻字を使い得る音節

※太い四角は、それが実際に使われた箇所

※細かい四角は、他の韻類の文字が使われた箇所



このように調べていくと、《オ列の〔哈・灰〕韻字》を複数の箇所で使用得る11首（2番、6番、7番、9番、11番、13番、18番、19番、29番、30番、37番）のうち、9首（八一・八％）において、実際に、《オ列の〔哈・灰〕韻字》が複数の箇所で使用されている（共起している）ことが確認できる（前頁上段で示したデータの通り）。

さらに、78頁で見たエ列・オ列共用の字種（歌謡範囲に限れば、「倍」字と「陪」字）が、エ列に使われる歌謡の状況と、オ列に使われる歌謡の状況を比較してみる。

まず前者、即ち「倍」「陪」両字がエ列に使われる歌謡の場合は、《オ列の〔哈・灰〕韻字》を複数の箇所で使用得る15首のうち、それが実際に複数の箇所で使用されるのは僅か1首<sup>(35)</sup>（六・七％）である。且つ、半分以上を占める9首<sup>(36)</sup>では、《オ列の〔哈・灰〕韻字》が全く使われない。

【倍】「陪」両字をオ列に用いる歌謡における

オ列の〔哈・灰〕韻字の使用状況（対象5首）

卷三（8番）	倍	陪	（2箇所）	★
卷七（22番）	陪	倍	（3箇所）	★
卷九（29番）	陪	陪	（2箇所）	★
卷九（30番）	陪	陪	（3箇所）	★
卷九（32番）	陪	陪	（2箇所）	★

それに対し、後者、即ち「倍」「陪」両字がオ列に使われる歌謡の場合（上段に列挙）は、対象5首（8番、22番、29番、30番、32番）の総て（一〇〇％）において、《オ列の〔哈・灰〕韻字》が共起している（総数は、対象5首中12個。1首につき二個半の割合）。ここで「夜摩<sup>(37)</sup>陪<sup>(38)</sup>波<sup>(39)</sup>区<sup>(40)</sup>理<sup>(41)</sup>能<sup>(42)</sup>倍<sup>(43)</sup>邏<sup>(44)</sup>摩<sup>(45)</sup>」（22番）、「瑠<sup>(46)</sup>倍<sup>(47)</sup>廻<sup>(48)</sup>利<sup>(49)</sup>能<sup>(50)</sup>」（29番）、「異<sup>(51)</sup>根<sup>(52)</sup>廻<sup>(53)</sup>倍<sup>(54)</sup>呂<sup>(55)</sup>之<sup>(56)</sup>茂<sup>(57)</sup>」（30番）、「茂<sup>(58)</sup>陪<sup>(59)</sup>之<sup>(60)</sup>」（32番）というように近接して共起する場合が多く見受けられる点にも注意したい。

歌謡1番末尾の文字、「灰」韻字の「廻」に関し、これが「エ」に充てられたか「ヲ」に充てられたか、このことを考える場合、以上のような《オ列の〔哈・灰〕韻字》の共起傾向についても十分に考慮すべきである。80頁で既に見た通り、現に、当該「廻」字の近傍にオ列の音節（具体的には「の」の音節）が存在し、その音節に〔哈〕韻字の「廻」が使われる（第五句の二文字目）。この文字使用状況に鑑みれば、歌謡1番の当該「廻」字は、オ列の「ヲ」に充てられた可能性が相応に高いと見なければならぬ。

おわりに

最後に全体の議論をまとめておく。

日本書紀β群においては、《オ列の〔哈・灰〕韻字》が多用され、それは、古音系の仮名と捉えられる。この場合、

「廻」の呉音が「エ」であつても、紛れもなくβ群である件の書紀歌謡1番においては、オ列の「ヲ」に「灰」韻字の「廻」が充てられた可能性を十分に想定し得る。

就中、オ列の「の」に「哈」韻字の「廻」が使用される歌謡1番においては、その可能性が高いと言える。《オ列の「哈・灰」韻字》は共起する傾向にある（即ち使われるとなると、繰り返し使われる傾向にある）からである。

一方、語法の面から言うならば、やはり、各者の指摘の通り、「エ」と見るのは無理がある（一言で言えば、結局、体言に後接する「エ」は皆無という表現になるだろう）。逆に「ヲ」であれば、類例も豊富であり、「文末にあつて活用語の連体形・体言につき、文の内容に対する確認を表わし、詠歎の意を添える」用法（時代別国語大辞典上代編829頁）、あるいはまた、直前の体言を強調、ないし特立しつつ、詠歎の意を添える用法として、よく理解できる。

つまり、語法の面から見て、敢えて「エ」と訓む必然性は全く無いうえに、漢字音の面から見て、今回の問題である書紀歌謡1番に関しては、オ列の「ヲ」に「灰」韻字の「廻」が充てられた蓋然性を指摘できる。したがって、当該箇所の訓みは、古訓の通り、「ヲ」でよい。

#### 注

- (1) 近年、森博達氏の区分（α群・β群）に関し、一部疑義を呈する榎本福寿氏、松田信彦氏などの論も知られるが、漢文で書かれた本文の部分をとりあげるものであつて、今回の議論には関わらない。
- (2) 小学館新編全集『日本書紀』（一九九四）に従つたが、岩波大系『日本書紀』（二九六七）も同じ。
- (3) 萬葉仮名としての「廻」字の用例は、この書紀歌謡1番を除くと、新詠華嚴經音義私記の1例（廻牟）が知られるのみである。
- (4) 兼夏本、私記乙本、釈日本紀など。そのほか歌学書なども須く「ヲ」と訓む。中世、近世、近代を通じて、この訓みが疑われたことは無いようである。
- (5) 大野晋『上代假名遣の研究—日本書紀の假名を中心として—』（岩波書店、一九五三）の後篇。本文篇の208頁および語彙篇の274頁。「エ」と訓む理由は未載。
- (6) 丸山林平『定本日本書紀』（講談社、一九六六）も、釈文を「その八重垣を」とする（注釈せず）。
- (7) 「エは間投詞。天智十年十二月条の歌謡に『え苦しゑ；吾は苦しゑ。』と続くが、天智紀の例は、形容詞に後接し、典型的に「一人称の情意の表現」（時代別国語大辞典上代編826頁）である。注10も参照。
- (8) 書紀のテキストのみならず、広く「エ」という訓みが定着している。たとえば、学研新漢和字典（藤堂明保・加納喜光編、二〇〇五）の【廻】の見出し字の音

仮名の項に、「エ。贈廻夜霸餓岐廻（ソノヤヘガキエ）  
〔紀・歌一〕とある。

(9) 書紀歌謡の担当は土橋寛氏。「エという助詞が名詞の下に添う例がないので、しばらく古事記のままにヲと訓んでおく」と頭注にある。同じ土橋寛氏の『古代歌謡全注釈 日本書紀編』（角川書店、一九七六）は底本に岩波大系『日本書紀』を採用し、釈文を「その八重垣<sub>ニ</sub>」に作るが、『釈紀』卷二十三、『私記』乙本のヲの傍注を指摘し、「用言に添えた問投助詞の例はあるが、体言の下に添えた例がないのは、疑問」とも述べる。現代語訳は、「そのりつばな八重垣を」。

(10) まず武田祐吉『記紀歌謡集全講』（明治書院、一九五六）は、「エの場合、感動の助詞とすべきであろうが、体言にエの接続した例は存在しない」と極簡単に指摘し、大野透『萬葉假名の研究』（明治書院、一九六二）も、「感動助詞乃至感動詞のエは感動詞（萬葉歌謡3406の例に就ては助動詞ムが感動詞モに由来する事に留意）又は形容詞に後續するのを例とし、名詞に後續する確實な例は見えないので、其ノ八重垣ヲのヲに當る假名と見るのが妥當である」と指摘する（125頁）。無論これらの指摘の背景には、「名詞に後接する『ヲ』は極めて一般的である」という事実がある。歌謡1番と同様に歌末で名詞に後接する「ヲ」の例も数多い。

同じ感動の助詞といつても、「エ」の場合は、大半が形容詞の終止形に後接し、「大体、一人称者の情意の表

現に用いられる」（時代別826頁）。「もつばら自分自身に向かう表現」とも言われる（『國文学・解釋と鑑賞 日本語における助詞の機能と解釈』の間投助詞の項。酒井憲二氏が担当。442号、至文堂、一九七〇）。大野晋氏が岩波大系『日本書紀』の頭注に掲げる天智紀の例は、その典型である（注7参照）。それに対し、文末に位置する「ヲ」は、必ず体言（または活用語の連体形）に後接する。文の内容あるいは直前の体言を強調しつつ、詠歎の意を添える——体言の示す事物にスポットを当てる表現である（書紀歌謡1番の場合も、感動の中心は「八重垣」にある点に注意）。歌謡1番の「贈廻夜霸餓岐廻」が、「我」でなく「汝もしくは他」を指向している」という宮地敦子氏の指摘も既にある（『國文学・解釈と教材の研究 古典文法の第二総合探究《助詞篇》の「ニ」の研究』の項。學燈社、一九五九）。こうした用法の違いが、「体言にエの接続した例は存在しない」という事柄に直結している。

(11) 語法の面から「エ」を許容する趣きの記述も見受けられなくはないが、それらは総じて、「<sub>ニ</sub>を生かすとすれば」（注9土橋前掲書）といったコンテクストの中で述べられる点に注意しなければならぬ。

(12) 有坂秀世『上代音韻攷』（三省堂、一九五五）。第三部の第一篇「総論」中に「漢字音（古代支那語の音韻組織）」という章があり、その中に「古音論」という節がある。中国の古音を論ずる。引用は357〜358頁。

(13) この引用文の後に、注10に示した引用文が続く。

(14) 大野透『萬葉假名の研究』(明治書院、一九六二)の80〜82頁。尚、大野透氏は「倍」「陪」兩字に關し、「嚴密には〔灰〕韻に屬すべきもの」とするが、特に「倍」字については、現在も、〔灰〕韻として扱うか、〔哈〕韻として扱うか、各論者により分かれる。

(15) 同125頁。注10に示した引用文の後に続く。

(16) 森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』(大修館書店、一九九一)の主として第二章(10〜53頁)。特に、その中の「表1」「表2」「表15」「表14」を参照。

(17) 歌謡の仮名に關してβ群とされるのは、卷一〜卷三、卷五、卷七、卷九〜卷十三、卷廿二、卷廿三。以上の12卷(卷四・六・八・廿八・廿九は歌謡不在)。

(18) 訓注は卷廿七を除く全卷に存在し、β群とされるのは、卷一〜卷十三、卷廿二、卷廿三、卷廿八、卷廿九の17卷だが、字種の相関の観点などから、卷一と卷二と卷十一の訓注は、β群とは認定し難い(別稿予定)。訓注の用例数は、この3卷を除いた(以下同)。

(19) 今回の問題を考える際、〔哈〕韻と〔灰〕韻を特に区別する必要はない。また、注14の通り、「倍」字の扱いが現在も定まらない。そこでカテゴリー統合して表に示した。〔哈〕韻または〔灰〕韻の文字を便宜的に〔哈・灰〕韻字と書く(以下同)。尚、朝鮮漢字音では、〔哈〕韻と〔灰〕韻は音韻的に対立し、〔灰〕韻のみに「o」が現れる(伊藤智ゆき『朝鮮漢字音研究 資料編』汲

古書院、二〇〇七を参照)。これはu介音により円唇性が相対的に増す結果とも考えられようが、書記β群では、むしろ〔哈〕韻字のほうが多く使われており、u介音の有無が反映されていない。この点からも兩韻を区別する必要はない。

(20) 便宜上、β群(α群)との親近の度合いを測る作業に對し、B(A)の符合を充てる。今後、踏襲する。

(21) 龜山泰司「書紀歌謡85番の『奴底』について—α群の字音表記の在り方から考える—」(『萬葉語文研究 第4集』和泉書院、二〇〇八)を参照。

(22) β群(α群)であれば、総じて、「β群(α群)の固有字種」の使用割合が「一〇〜三〇%」程度。

(23) 注21の龜山前掲論文は、母音複用字種(異なる母音に複用される字種)をα群とβ群に分けて載せ、これを対比的に論じている。

(24) 上代におけるハ行子音は一般に兩唇摩擦音(Φ)とされる。ハ行転呼音が上代に既に一部とはいえ見られ、また、後の時代にハ行とワ行の混同が起ることからも分かる通り、ハ行はワ行に相対的に近い。そのハ行において〔哈・灰〕韻字の「倍」がエ列とオ列に殆ど拮抗して用いられるという状況は、当該の「廻」字が「ヲ」に充てられた可能性を推測せしめる。

(25) 「倍」の呉音には「バイ」も勿論ある。〔哈・灰〕韻字の呉音形は「㊦イ」形が多い中で、「倍」「廻」兩字に共通して「㊦」形の呉音形があるということ。呉音形

の表示方式は沼本克明『日本漢字音の歴史』（東京堂出版、一九八六）に従った。「カイ・サイ・タイ・ナイ・ハイ」などをまとめて「㊦イ」形と呼ぶ。

(26) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』（汲古書院、一九九七）の中に「蟹攝の呉音形を巡って」という章がある。図式は208頁。エ列乙類音が「㊦」<sup>㊦</sup>という連母音に遡るとする立場から、蟹撰

一・二等のㄷ重母音は、上代日本語のエ列乙類音に一旦定着させられ、平安時代に入り、甲乙の区別の消滅に伴って五母韻体系の「㊦」形の呉音形として定着したと論ずる（注27次掲書102、103頁も参照）。

(27) 沼本克明『日本漢字音の歴史』（東京堂出版、一九八六）。当該項は81頁から始まる。引用は83頁。この著書の執筆段階で、おそらく沼本氏は、注26前掲書の図式（208頁）の如き見通しをも既に持っておられたと想像するが、この点は定かではない。

(28) 沼本氏の「上古音系の母胎音に基づいたものと見る」とが出来る」（注26前掲書208頁）という表現は言い得ている。既に有坂氏も注12前掲書356頁で「……和名抄で『愛宕』を於多岐と訓じてゐるが如きは、古音の名残と思はれる」と述べ、直後に358頁で「……和名抄では『愛宕』を於多岐と訓じてゐるが、同様に、神代紀上では灰韻の「廻」をヲの假名に用ゐてゐる」と述べている。本論文の結論も同じ。「古層の假名」（古層假名）の個々の内実は更に問題となる（たとえば注16森前掲書155頁

に「奇妙」との指摘がある）が、今回の問題に直接は影響しない。背景漢字音の古層の問題と、日本の仮名としての古層の問題は、切り分けて考える必要があるということだけ付け加えておく。

(29) 付言する。「約」にせよ、「墓」にせよ、その用例は書記β群に限り、しかも一度だけ歌謡で使われる。

・「ク」区42勾14句11俱7玖6久2約①（β群歌謡）

・「モ」茂49毛28望15母5暮3慕2莽2墓①（同右）

同様に、β群歌謡の70箇所ほどの「ヲ」に対し、一度だけ「惋」字が使われる（この字も他資料には皆無である）。日本書紀の稀用字は、α群・β群を問わず極めて多い。他に選択肢（鳥）字などがあっても、一度だけ「廻」字が使われることは普通に有り得る。

(30) α群の場合は、7箇所（歌謡5箇所、訓注2箇所）の総てが〔祭〕韻（衛7）。それに対し、β群の場合は、7箇所（歌謡）のうち、6箇所が〔齊〕韻（恵5、慧1）、1箇所が〔灰〕韻（隈1）。

(31) 注26前掲書208頁で、沼本氏は「上古音系の母胎音に基づいたものと見る」ことが出来る古層の假名」として灰韻の「陪」のほか、β群の泰韻の「太」（歌謡2）、皆韻の「介」（歌謡27、訓注6）を挙げるところが、《オ列の〔哈・灰〕韻字》が使われない巻々（巻十・十二・十三・廿二）では、やはり、「太」も「介」も使われない（例外は、歌謡71番の1箇所のみ）。逆に、「太」や「介」が使われる歌謡（20首）を拾ってみると、六割を

占める12首に《オ列の「ハ・灰」韻字》が同居する。  
こうした事実にも注目すべき。

- (32) データは、「廻」字を用いる歌謡14首に対し、《オ列の「ハ・灰」韻字》を全抽出したものである。抽出の過程、太い波線や太い四角の用い方については、81頁下段の左半分に示したデータ（歌謡30番）を参照。

- (33) 歌謡47番も同様。また、「廻」と「廻」は一首中に共存し得ないことから、歌謡59番についても、第三句に

「廻」が使用される条件下では共起不能である。

- (34) 15首は、11、12、26、28、31、36、46、48、60、63、65、68、71、102、103番（数字は歌謡番号。以下同）。

- (35) 1首は、11番。

- (36) 9首は、12、36、60、63、65、68、71、102、103番。

- (37) 16首中、7首（11、26、28、31、46、47、48番）では、

「苔」（7箇所）や「廻」（2箇所）が使われるが、大体2首につき1個の割合である。「倍」「陪」両字をオ列に用いる場合（続いて本文で述べる）の五分の一ないし四分の一に過ぎない（低密度）。加えて、その大半は「苔」である。この場合、現に「廻」を用いる当該の歌謡1番において「廻」が「エ」に充てられた確率は、相応に低いと見ておくべきだろう。

- (38) 武田氏が挙げた「瑳伽梅ツツミ」（卷三・訓注）の例も、やはり近接して共起する一つの例である。

- (39) 注10および注7を参照。

#### 付記1

「ヲ」に「廻」が使われたことに関しては、あるいは表意性が関与しているかもしれない（八重垣が廻らされる様子が、「廻」の文字から窺える）。そうした例を書紀β群に認め得るかどうかは検討を要する。

#### 付記2

本論文は、上代文学会大会（平成22年5月16日）の発表に基づき、頂いた御意見を踏まえつつ、まとめたものである。佐野宏先生、瀬間正之先生、乾善彦先生、尾山慎先生、廣岡義隆先生、また、終始御指導を賜った毛利正守先生に感謝の意を申し添えたい。